1 父と娘

分かち合った体験

会津本郷町の記野利夫さん（四三）が一九九一年（平成三）年に骨髄移植のドナー登録をしたのは、二女で高校生の淳子さん（一八）の病気がきっかけだった。淳子さんは骨髄移植を受けようと骨髄バンクに登録をしており、「自分の娘がもらおうとしているのだから、自分でも提供しようと決意したのです」と明かす。

淳子さんが血液関係の病気と診断されたのは小学校四年生の春だった。三カ月余を病院で過ごしたが、退院後は持ち前の活発さも戻った。中学では、テニス部のキャプテンも務め、休むこともなく通学。しかし、週に二回、自宅でインターフェロンを注射するとなると抵抗を見せた。「今はもう実際の感覚を忘れたけど、かなり痛かったから」と淳子さんは告白する。

安定した状態が続き、「このままでいけば」と記野さん夫妻は願ったが、将来のことを考えて骨髄移植を選んだ。「命をかけた闘いになるかもしれない」という選択だったが、「成功する確率にかけよう。娘の今後の人生にとっても体験は生かされるはずだ」と積極的に考えた。

こうした間に、利夫さんの骨髄提供が突然、現実のものとなった。ドナー登録から約三カ月してＨＬＡ（白血球の型）が一致する待機者が見つかったからだ。

さらに九二（同四）年六月に名古屋市の病院で提供を行った。この日はくしくも淳子さんの運動会。母親の佐代子さん（四三）が学校に行き、利夫さんは一人でボランティアの世話を受けて提供に臨んだ。「もらう立場と提供する立場がよく理解できた」と利夫さんは話す。

両親に囲まれる淳子さん。父・利夫さんも骨髄を提供した

移植登録から五年が過ぎて淳子さんとＨＬＡが一致するドナーが現れた。「決まるまではとても長く感じた」と利夫さん。実際の提供までには時間がかかり、この間に抹消となるドナーもいる。

高校一年生になったばかりの九六（同八）年四月に、淳子さんは茨城県水戸市の病院に入院。佐代子さんは近くに住まいを借りて看病に備えた。淳子さんの心には「これでようやく注射から解放される」との思いがあった。

前処置にも耐えながら移植の日を迎えた。偶然にもこの日は、最初に入院したときと同じ二十一日。「主治医の先生が直接、骨髄を引き取りに行ってくれたが、無事に届くまではやはり気掛かりでした」と利夫さんは胸の内を明かす。

午後七時から骨髄の点滴が始まり、約四時間かかった。この間、両親は「移植された骨髄が娘の体内で生着しますように」とただ一心に願った。

感染症予防などに注意が払われ、無菌ベッドでの生活。退院は九月一日だった。「看護婦さんらが相手をしてくれたけど、むしょうに学校に通いたかった」と淳子さんは振り返る。

移植後約一カ月でドナーの女性に感謝の手紙を書いた。「命をいただいてありがとうございます。学校でがんばります」。淳子さんの経過は順調で、高校卒業後は医療分野で働くことも考えている。

記野さん夫妻は偽らざる心境を語る。「自分の時間を費やしてまでも娘に骨髄を提供してくれた女性の方には、本当に感謝の心でいっぱいです」

「もらう立場」と「提供する立場」

◇

県立医大第一内科で昨年九月、県内で初めて非血縁者間による成人の骨髄移植が成功した。ドナーを介した移植はまさに、「命の輪」の広がりであり、一方で、がんと共存したり、尊厳をもって生命を終えようという考えも広がってきた。変わりつつある生命観をシリーズで追う。